

白雪姫おじさん

いも

「先生、小耳に挟んだんですが……まだおひとりなんで私って？」

「まだもなにも、生涯その予定です」

私は昔から、一人で過ごすことが好きだ。

「きつと良い話し相手になりますわ。お願いしますよ、先生。あの子、まだ幼いのに両親を亡くすなんて……：あんまりにも可哀想で」

「そう思うなら貴方が引き取れば良い」

私は幼い頃から、一人で過ごしてきた。

「うちには三人も子どもがいるでしょう？ もう一人面倒見るなんて……」

「三人も四人も変わらないだろう」

私は誰にも面倒をかけない子どもだった。

「先生、なんたって小児科の先生じゃないですか。それなら安心だって、親戚一同賛成してるのよ」

私は親も親戚も子どももいらぬ！

「私は」

「おかあさん……」

「………変な子だったり、言うこと聞かなかったり

したら即、突き返しますから」

なのに、どうして。その日、私は自ら、独身貴族の称号を手放したのだった。

「いいですか？ 私は確かに小児科医ですが、子どもが好きなわけではありません。いいえ言い直します、患者以外の子どもは嫌いです。大嫌い。うるさくて我儘でトイレ行った後に手は洗わないし平気で落としたりもの食べるし物は壊すし言うこと聞かないし屁理屈ばかり言うし、大嫌いです」

「じゃあ俺が患者になればいいんだあ」

「ほら言うこと聞かない、ほら屁理屈言う。嫌い」

私以外の人間を乗せたことのない車の助手席に、その子どもは凶々しくも深く座り込んでいた。サイドミラーに私以外の顔が、シートともボブともつかぬ中途半端な髪の毛の長さの、いかにも子どもっぽい輪郭の子どもの顔が映っている。子ども特有の、木と黒板の匂いがする。

「どうか、おれ、もう中学生だよ。今学期から二年生。

小児科の患者にはなれないかも」

それが本当ならひどく幼く見える。見た目のせいというより、挙動のせいだろう。さつき、電話で話した自称親戚の中年女性の家からこの子どもを引き取ったときからせいぜい小学六年生だろうと思っていた。

「うるさい。とにかく、いいですか。私は親も親戚も子

どももいらぬ！ 両親を交通事故で亡くしたばかりの貴方にこんなことを言うのも酷だとは思いますが、あえて言います。私は望んで貴方を引き取ったんじゃないや。貴方に同情して引き取って幸せにしてやろうなんて微塵も思っていないや。むしろ二カ月前の電話で初めて存在が判明した、遠い、遠すぎる親戚に厄介払いの標的にされていい迷惑です。それを充分弁えて、私に迷惑をかけているという自覚をもって過ごさない」

「はあ……」

やや感情に任せ過ぎたか、と横目に子どもを見た。子どもはシートベルトを胸の前で握りしめたまま、足をパタパタ動かして車窓の外を眺めていた。車窓に反射する顔を見る限り、私の話は半分も聞いていなかっただろう。

私と配達業者しか上げたことのない家の玄関に、私のローファーより一回りは小さい、踵の潰れたスニーカーがバラバラと脱ぎ捨てられる。

「靴をそろえなさい」

「わあ、広い。この床、ダイリセキってやつ？ おじさん、オヒトリなんでしょ？ なんでこんなに広い家に住んでるの？」

あの自称親戚め、このクソガキに余計なことを吹き込んでくれたな。

「それは私がお金持ちだからです」

「お金持ちなのに奥さんいないんだね！」

「靴をそろえなさいと言ったんです」

「おじさん」

「黙りなさい」

この子どもは十分以上黙っていられないらしい。パソコンで仕事関連の大事な作業をするから黙っていなさい、と単純計算でもう三十回も言っている。

「お腹すいた」

「そうですか」

「晩ご飯、食べたいな」

デジタル表記の壁掛け時計は、ちょうど午後七時を表示していた。今日は貴重な休日のはずだったが、この子どもを自称親戚から引き取る作業で全て潰れたといっているだろう。私はダイニングテーブルの上に散乱した書類とノートパソコンをある程度片付け（通常、このような作業は書斎ですと決めている。今日もそうしていたが子どもがついてきて本棚を荒らしたので、やむを得ずダイニングで作業をしていた。今日からこれが新しい）通常になるかもしれないと思うと発狂しそうだ、キッチンへ移動して冷蔵庫を開けた。

「冷蔵庫は小さいね」

「私一人分の食品が入りさえすればよいので」

「よかった、でしょっ？」

「立場を弁えないさい」

残念ながら、子どもの言うことは正しい。私はどうせ頻繁に家に帰らないから私の食品はこれまで通りの量だが、今日からはこの子どもの分の食品も買い溜めなければならぬ。私の膝までの高さしかないこの冷蔵庫では無理がある。

「ほら。これ食べなさい」

子どもは私が差し出した袋を見て啞然とした。

「……冷凍チャーハン？」

「字は読めるようで安心しました」

「これだけ？ おじさんは？」

「私もこれですけど」

「ねえ、おじさん」

「食事中に話しかけられるのは嫌いです。それと、貴方におじさんと呼ばれる筋合いはありません」

「なんで？ お母さんの弟とかお兄さんとかのこと、おじさんっていうじゃない」

「おそらく私に姉妹はいません。貴方を昨日まで預かっていた方の言うことが本当ならば、私と貴方はあまりに遠すぎる親戚です。どこがどう繋がっているのか、私も知りません」

「そう……。じゃあおじさんのこと、なんて呼ばいい？」
正直、なんと呼ばれようと嫌だが、「ねえ」などと呼ばれ

るのも腹が立つ。

「……………先生、ですかね」

この子どもがいる限り、私の日常は崩れる一方なのだが、せめて、他人から日常的に呼ばれている呼称で呼ばれたい。

「じゃあ先生も俺のこと、貴方って呼ぶのやめてよ。これから一緒に暮らすんだから、貴方じゃなんだか他人っぽすぎるよ」

「貴方、スプーンの持ち方が変ですよ。ほら、私の持ち方を真似なさい」

子どもは頷いて、「おれ、結良」と言った。

「ゆら？」

「結ぶ、に、良い。良い縁ありそうだよね」

結良は私と目を合わせて、また、一人で納得して頷いた。

「ただいま」

玄関の扉は冷え切っていた。学校が終わってから塾に直行して、四時間。もう夜の八時半を回っている。お父さんはまだ帰ってこない。僕はお父さんがいつ家に帰ってきているのかわからない。

ランドセルをリビングのソファに放り出して、冷蔵庫へ向かう。何をチンしようかと冷凍室を開いたら、そこには冷凍チャーハンの袋がギツチリ詰まっていた。先週の夜、僕が食卓でこれを食べているときにお父さんが帰

ってきた。「先々週もそれ食べてなかったか。それが気に入ったのか」と聞かれたので、本当は偶然、お父さんが帰ってきた夜の二回とも僕がこれを食べただけだったけど、「うん。これ、すごくおいしいんだ」と愛想笑いをした。だから、冷凍室がこんなことになっているらしい。電子レンジにチャーハンを盛ったポウルを入れて、五分間、四字熟語集を見て待つ。もうすぐ中学受験の本番だから、こういう空き時間を勉強にあてるように、お父さんや塾の先生から言われている。

ダイニングのテーブルは、端から端を見るのがちよつと大変なくらいの、まるで童話の王様が使うような長さだ。今夜も、ここに乘るのはチャーハンの盛られた一つのポウルと、コップ一つだけ。食べ始めて十分。またスプーンの持ち方が変になっていることに気がついて直した。ついこの前、学校で、給食の時間に隣の席の女の子に言われて初めて気づいた、僕の悪い癖だ。

また十分すると、持ち方が変になる。直す。十分経つ。元に戻ってる。直す、直す、直す。放り投げる。スプーンが真っ白い壁に当たって、カランと床に落ちた。

どうして家の中でまでマナーなんか気にしなくちゃいけないんだ。誰も見てないのに……。

翌朝、お父さんは壁に汚れと傷がついているのに気づいて、僕を問い詰めた。放り投げたから、僕の身長じゃありえない位置に痕がついてしまっていて、僕は言い訳

が思いつかなかった。昨夜のことを正直に言ったら一発だけ叩かれて、「幼稚な癩癩を起すな」「お前もあいつのような大人になるつもりか」と叱られた。

「おはよう、先生！ おばさんちではお布団で寝かせてもらってたけど、先生んちはベッドなんだね。ベッドで寝たの、昨夜が初めてだったんだけど、ふかふかして、すごいよく寝られたよ。ベッドってすごいね」

「ベッドがすごいというよりも、私がすごいベッドを買っているだけです」

「へえー。朝ご飯はなに？」
私は冷蔵庫から、封を切った昨日のチャーハンの残りを出した。

「チャーハンが好きなの？」

「あるから食べているだけです。この前の買い物ときは食べたい気分だったのでしょうが、別に好きではありません」

「おれ、チャーハン好きだけど、朝はパンがいい」
「また図々しいことを」

チャーハンを冷凍室に戻し、代わりに、冷蔵庫からパンケーキの袋を出した。私の数少ない好きなものだから、正直言って結良にくれてやるのは勿体ないが、あいにく今はチャーハンの他にはこれしかない。

「わあ、朝からパンケーキなんてしゃれてる！ おれ、

パンケーキ好き」

「貴方、朝はパンがいいって言ってたじゃないですか」

「パンはパンでも」

屁理屈にもなっていない。

「さっさと温めて食べなさい」

「二枚入ってるよ。こんなに食べていいの？」

「いいわけないでしょう。一枚は私の分です」

今日、私ที่บ้านに帰ってくると、結良は中間テストの成績表と、学級通信のプリントを持って玄関に走ってきた。

「おかえり、先生」

「はい、ただいま帰りました。おや、もう結果が返ってきましたか……。貴方、一学期と変わらず成績は良いですね。日常生活の面でももう少ししっかりしてほしいものです。今日は忘れ物しなかったでしょうね？」

「うん。へへ、この前は体育着届けさせちゃってごめんなさい……」

リビングへ行くと、学校指定の鞆がソファの上に置きっぱなしになっていた。

「こちら！ 私はいつもなんて言っていますか？」

冷蔵庫から探し当てたプリンを手に、結良は肩をすくめた。

「鞆は自分の部屋に置くこと」……

「よろしい。それと、夕食の前に菓子を食べないこと。」

夕食の後になさい」

「はあい」

時計に目をやると、既に二十時を回っていた。冷蔵庫には、昨日の作り置きがそっくりそのまま残っていた。結良は私が帰ってくるのを待って、まだ夕食をとっていないようだ。普段、私の帰りはもつと遅いので、結良は一人で夕食をとっている。どうやら二十時半頃までは、私と食卓につくために夕食に手を付けずに待っているらしい。間食をしたくなるのも無理はない。

「私に気を遣わず、先に食べていたってかまいませんよ。八時間も何も食べないのはつらいでしょう」

「ううん。全然大丈夫」

そう言いながらも、結良はプリンの容器を両手で握りしめたままだった。

夕食後、作り置き用の野菜を茹でている間に学級通信に目を通した。

「へえ、来週の土曜は模試ですか」

「はあ……めんどくさいなあ」

「何を言うんです、もちろん学校の定期テストも重要ですが、それと同じくらい模試も重要ですよ」

「だって、先生はお医者さんになるくらいだから、中学生の頃から真面目な優等生だったんだろうけど……おれはそんなに出来良くないしさ」

「そんなことはありません」

結良は、確かに生活面ではやや心許ないが、定期テストの結果は同学年の子ども達の中では上位だといえるし、課題や自主勉強にも真面目に取り組んでいる。運動面はよく知らないが、スポーツは好きだというし、何より友達に恵まれている。両親を亡くしてからも、それが原因で友達との関係に亀裂が入ったことはないようだ。

一方、中学生の頃の私ははつきりいって、ただ成績が良いだけの子どもだった。運動は全くできないわけではなかったが、どちらかというと苦手だったし、友達も多くはなかった。当時の友達の名前を、一つも覚えていないあたり、深い関係でもなかったのだろう。

「貴方は……………貴方は、私よりも良い子ですよ」

結良は納得いかなそうに眉間にしわを寄せて唸る。私はそれ以上なんと言えがいいのか分からなかったため、再び学級通信のプリントに視線を落とす。

「あれっ？ 今度、授業参観があるんですか」

「ああ、うん……………」

どうやら授業参観のついでに、保護者会で高校進学に関する話もされるらしい。そうか、二年生の秋ともなると進路について本格的に考え始めなければならない時期か。

この子を引き取ってからまだ半年弱だと思っていたが……………もう半年弱なのだ。なのに、私はこの子のことを、学校から配られる便りやこの子の話から得た、間接的な情報からしか知らない。保護者会への参加は強制ではな

く、未参加の場合は後日、話の内容を要約したプリントをもらえるそうだが……………

「三週間後、ですか……………」

「うん。でも大丈夫、来られなくてもプリントもらえるから」

私は春にあった三者面談の際、仕事の都合で日程を二転三転させ、担任の先生と結良にずいぶん迷惑をかけた。

つい先日の合唱コンクールも、結良には来てほしいと言われていたが、直前になって仕事の予定が入り、結局行けなかった。結良の中学校では携帯電話の所持を禁止しているため、「急遽行けなくなった」という旨の連絡すらできなかった。その日、私は結良が怒っているだろうと思っただけで家に帰ったが、結良はいつも通りに振る舞っていて、あれほど「絶対、おれのクラスが優勝すると思う」と意気込んでいた合唱コンクールの順位のことすら、口に出さなかった。それ以来、結良は学校の行事のことを私にあまり話さない。

「おかえりなさい、お父さん」

「お前、まだ起きてたのか。何時だと思ってる、早く寝なさい」

「あの、僕、美術の授業で描いた絵が、先生に選ばれてさ、今日……………じゃなくて、昨日？ ……の文化祭で、展示された。これが、その絵」

僕は、水彩絵の具の水分で歪んだ画用紙をお父さんに差し出した。調子が悪くて時折点滅する玄関の電灯の下、しよぼしよぼした目で見た僕の絵は、学校の体育館に展示されていたときに比べて、出来が悪く見えた。

「……これ、どこの風景だ？」

てつきり、コメントがあるとしたら中心に描かれた僕の自画像についてだと思っていた僕は戸惑った。美術の先生は、背景は自由に決めていいと言ったから、僕は家のリビングにした。……二カ月前に離婚して家を出ていったお母さんが作った、テレビベアが映っている。わざとやったんじゃない。

「この絵、構図を決めたのは三カ月前なんだ。背景、学校の校庭でもよかったんだけど」と言い終わらないうちに、お父さんは無言で画用紙を僕に返して、僕の横をすり抜けていった。

「せんせー、あしたね、私ね、学校でじゅぎょーかんさんがある」

インフルエンザの予防接種に来た患者の女の子が、腕に絆創膏を貼られている間に不意にそう言った。

「ああ、授業参観？ 楽しみだね。私の親戚の子も、明日が授業参観の日だよ。若菜ちゃんのお父さんお母さんは来てくれるのかな？」

「うん。だから熱出たらこまる……」

「若菜ちゃんはこの注射で熱が出ちゃったことないから、きつと大丈夫だよ」

その後、医局でお喋りな看護師から、「先生、天涯孤独みたいに言ってたじゃない。ご親戚にそんな年頃の子がいたなんて」とか「どんな子なの？ 叔父さんとしてはやっぱ可愛い？」とか、根掘り葉掘り質問責めに遭った。

「結良」

授業の開始直前、廊下で私に呼びかけられた結良は、照れ笑いをして何か言おうとした。しかし、口を開いた夕イミングでチャイムが鳴って、結良は慌てて教室に入っていた。

数カ月後、結良はもともと預かられていた、あの自称親戚の中年女性の家に戻った。結良が夜中まで帰ってこなくて、一晚中探し回ってようやく見つけた時、私は結良の頬を叩いてしまった。結良は友達の家出に巻き込まれていたようで、叩かれる結良をその友達が見ていた。この一件が問題になり、親戚一同が、他の引き取り先を探すことに決めた。

「またね。絶対だよ」

自称親戚の中年女性が迎えに来て、開いた玄関の扉から

射し込む光に照らされた結良が眩しかった。

「またね、叔父さん」

私は無言で手を振った。光が消えた。

「さよなら、結良」

「ただいま帰りました」

私の生活は、無事日常に戻った。そう、いつも通りに戻っただけ。

夕食の準備のために、火にかけてフライパンが温まるのを待っている間、私はなぜか泣いていた。